

JAFCOF 釧路研究会
リサーチ・ペーパー vol.18

尺別に生まれて:個人の体験を振り返る
—村雲雅志氏による講演の記録—

編集:

笠原 良太 早稲田大学文学学術院助手

kasahara.ryota@aoni.waseda.jp

2020 年 11 月 30 日

目次

はじめに	1
------	---

村雲雅志氏講演「尺別に生まれて：個人の体験を振り返る」

1. 尺別炭砦時代	3
はじめに——自己紹介	
尺別炭砦幼稚園時代	
尺別での生活	
尺炭の教員たち	
炭砦のライフスタイル	
2. 尺別を離れて、雄別、阿寒へ	11
雄別炭砦小学校へ転校：小学3年、1969/4	
阿寒小学校時代：小学4～6年、1970/4-1973/3	
釧路市立春採中学校時代：1973/4-1976/3	
転校を重ねて	
生まれた街がなくなること	
3. 高校から大学へ	17
釧路湖陵高校時代：1976/4-1979/3	
北海道大学医学部進学：1979/4-1981/3	
北海道大学医学部（基礎）：1981/4-1983/3	
北海道大学医学部（臨床）：1983/4-1985/3	
結婚：1984/11	
4. 医者として	20
医者になる：1985/4-	
釧路へ：1996/7	
現在	
故郷が無くなるということ	
質疑応答	24
配布資料	30
参加学生の感想	34
「故郷をおもうということ」（村雲雅志氏）	37
解題（笠原良太）	38

は じ め に

本釧路研究会リサーチ・ペーパーVol.18は、1960年代に尺別炭砦（北海道旧音別町）で幼少期を過ごした村雲雅志氏による講演の記録です。村雲氏に初めてお会いしたのは、2017年3月、父親である忠夫氏（元尺別炭砦中学校教諭）へのインタビュー調査のときでした。同席いただいた雅志氏は、尺別炭砦で過ごした幼少期の生活や閉山の様子、相次ぐ転校などについて、鮮明な記憶をもとにお話下さいました。村雲氏の人生経験は、炭鉱に暮らした人びとについて研究する私たちにとって、重要な示唆を与えてくれると考え、今回、講演をお願いしたところ、ご快諾いただきました。

本講演は、2019年9月19日に早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミ「“生きている炭鉱”と釧路研究」フィールドワークの一環として、学部3年生、4年生を対象に、釧路市立博物館講堂にて行われました。予想に違わず、村雲氏のお話は、私たちを強く引き付けるものでした。私たちは、この講演の内容を記録として残すことが肝要と考え、リサーチ・ペーパーとして刊行することにいたしました。本書には、講演記録のほかに、質疑内容、配布資料、参加学生の感想、解題をあわせて所収しています。

村雲雅志氏には、ご多忙のなかご講演いただきましたこと、さらに講演録刊行のご快諾ならびに丁寧なご校正をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、村雲氏のご友人であり、私たちに村雲氏を紹介していただいた石川孝織学芸員（釧路市立博物館）に御礼申し上げます。最後に、編者の怠慢により、刊行が大変遅くなりましたことをお詫びいたします。

2020年11月30日

早稲田大学文学学術院助手
笠原良太

村雲雅志氏プロフィール

1960年北海道旧音別町尺別生まれ。父は元尺別炭砦中学校教員の村雲忠夫氏。尺別炭砦小学校から雄別炭砦小学校に転校し、閉山により阿寒小学校に転校。卒業後、釧路市立春採中学校、釧路湖陵高校理数科、北海道大学医学部に進学。1985年に北大泌尿器科に入局。その後、道内各地の病院と北大病院で勤務し、2001年医学博士号取得。2002年から釧路労災病院、2012年から現在にかけて市立釧路総合病院泌尿器科で勤務。

付記

- ・ 本書掲載の写真の一部は、村雲雅志氏が撮影されたものを使用しています。今回の掲載にあたってご提供いただきました。
- ・ 本講演の開催にあたっては釧路市立博物館にご協力いただきました。感謝いたします。

「尺別に生まれて：個人の体験を振り返る」

お話：村雲 雅志氏（市立釧路総合病院 泌尿器科医）

講演日：2019年9月19日

1. 尺別炭砦時代

はじめに——自己紹介

笠原：本日は、村雲雅志先生にご講演をお願いします。村雲先生は尺別炭砦のご出身で、幼少期から青年期にかけて尺別炭砦、雄別炭砦、その後、太平洋炭砦地域に移られました。まさに、閉山によって故郷を喪失するというご経験をなさいました。本日は、先生から、故郷とはなにか、そして、炭砦での生活とはなにかなど、豊富なテーマについて、お話ししていただきます。それでは、よろしくお願いいたします。

村雲：どうも、ご紹介ありがとうございます。みなさま、こんにちは。村雲雅志と申します。お題は「炭砦に生まれ育ち、故郷が喪失することによって、自分がどのように考え、どのような人間になったかを語ってください」ということで、私、そんなたいそうな人間ではありませんので、いろいろと思いつくままに自分を振り返ろうと思います。若いみなさんから見たら「オッサンのたわごと」ですが、気楽に聞いていただけたらと思います。

村雲というのは、どうやら京都のほうから愛知県あたりに賜った、当時「村雲長者」というのが愛知県にいたそうで、いまも愛知県の名古屋市の外れのほうに、「村雲地域」というのがあります。でも、私の祖父がそのあたり出身だったのですが、お茶問屋をやっていた娘をたぶらかして、駆け落ちして、北海道に来てしまいました。その上の消息はまったくわからない。戸籍のあったところは水害で流れてしまって、当時の資料は残っていないということです。私は駆け落ち者の孫であります。

1960 年、尺別に生まれました。尺別にいたのは小学校の 2 年生まででした。ちょうど、閉山の 1 年前になります。なにを思ったか、転校した先が雄別。これも閉山しちゃうんです。1 年で閉山して、隣の阿寒町に移り、小学校を卒業したときに、釧路市の春採に行きました。奇しくも、阿寒以外は炭鉱の街ばかりでした。中学、高校と釧路におりまして、大学から札幌、そのあとは仕事で道内各地を転々としております。1 か所に 10 年以上いたことはありません。

私の父、村雲忠夫は、尺別炭砦中学校の教員をしていました。教科担当は音楽で、途中、結核で療養した期間が 3 年間ありましたが、足掛け 14 年と、長い期間尺別炭砦中学校におりましたので、否応なく父の名前を知っている、あるいは習ったという人たちは、とても多いです。

私のいまの仕事は、この隣りにある市立釧路総合病院で泌尿器科の医者をやっております。ちゃんと仕事をしています。手術もしています。それから、自分のライフワークと言ったら変ですけど、古楽器、むかしの西洋の楽器、みなさんよくご存じの縦笛のリコーダー、それからヴィオラ・ダ・カンバという弦楽器を演奏いたします。リコーダー、こんな感じですね(写真)。うしろにチェンバロの伴奏がついています。ヴィオラ・ダ・カンバって、チェロに似た感じの弦楽器で、なんて言いますか、世の人が、あまりやらないことしかやらない、ニッチなところで生きているという。



リコーダー演奏
(チェンバロ、岩渕恵美子氏)

どんどん脱線しますが、最近の趣味は、裏庭でハーブを栽培して市内のレストランにこっそり持って行って、物々交換でパンをもらったりしています。そういうのをを使った料理も好きで、フランス料理のお店に「男子料理部」というのがありまして、3 か月に 1 回ぐらい、好きな物を作って、食べて、飲みまくるという会のメンバーです。山菜採りなどもそうです。これは庭で植えているディルというハーブですね。魚介類に非常に

よく合う。この写真は、エゾシカの足を1本もらったので包丁で捌いているところです。猟奇殺人犯ではありません。その鹿肉を使って、ソテーしたものが右の皿です。一応食える物を作ります。

家族は、現在、妻と子ども4人。子ども4人と言っても、みなさんよりもっと大きくて独立しております。あと猫3匹。妻、子どもの写真は「イヤだ」と言われたので、猫の写真を出します。躰の悪い猫たちで、猫というのは同じ空間にいても、決して人間の都合のいいようには動いてくれないで、好きにしている状態です。



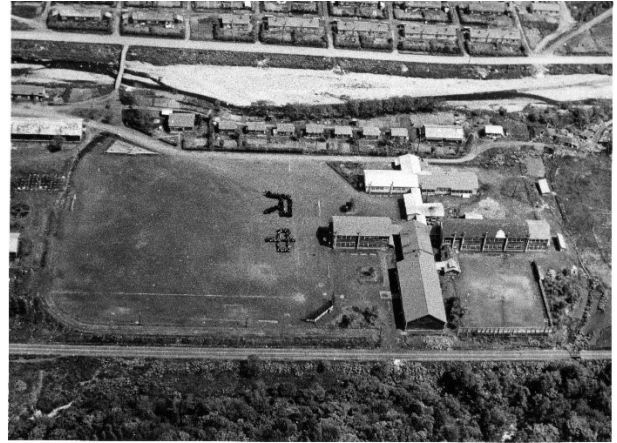
エゾシカの足を捌く

尺別炭砒幼稚園時代

小学2年生までの記憶ですから、自分で盛ってしまっている部分もあると思います。尺別時代について強烈だったのは、2歳のときに父親が結核にかかり、3年間洞爺湖畔の教職員の結核療養所に収容されました。その間、私は教員住宅で母子生活でした。周辺の人たちからは、悲劇のヒーローみたいで、大人は自分に対して親切にしてくれるものだと思われ、勘違いした子どもでした。母親も、いま思うとかなり気の強い人だったと思います。外面がいいんですけど、ウチではけっこう厳しかった記憶があります。オモチャというのもとくになくて、家に足踏みオルガンがあったので、それで音を当てるとか、知っているメロディーをたどって弾いた記憶があります。音楽教育のはしりだったのかもしれません。

それから、教員住宅なので、すぐ近くに小学校・中学校、それから小学校のなかに幼稚園があって、自由に入れてもらえていました。だから自分より年長の人たちの絵本だとか図鑑などを、おもしろがって見せてもらえました。それから教員住宅のなかに独身の先生たちがいるのですが、なにせ若い人たちの娯楽がない。あまり変なことをやって

いると、先生たちや父兄の目があって、いろいろ言われるものですから、憂さ晴らしの道がないということで、よく家に遊びに行ってかまってもらったり「エイトマン」とか「鉄人 28 号」の絵をクレヨンで描いてもらった記憶があります。幼稚園の頃に、先生に誘われて、プラネタリウムみたいなものを、中学校にあった望遠鏡で見た記憶があります。いま思うと早期教育だったんですね。



尺炭小・中学校校舎と教員住宅
(尺別側を挟んで炭鉱職員居住区、錦町)
元尺炭中教頭提供

ただ、そんな言葉もないし、塾・予備校などもない時代でした。先生たちも若かったっていうのもありますけど、かなり自由な空気だったと思います。

幼稚園に入る前、目の前の幼稚園が火事になりました。ちょうど、ここから非常口ぐらいの距離しか離れていないところで、メラメラと燃えているなか、母が必死の形相で、家財道具をまとめて、裏に流れていた尺別川の川岸に放り投げていました。尺別川は、選炭場の廃液をそのまま流していたので、真っ黒でした。「黒川」(くろかわ)と呼んでいました。いまだったら許されないことですが、川というのは黒いものだと思っていました。その黒川も閉山して1年経たないうちに、まったくの清流になって、ヤマメが上ってきたといいます。自然の回復力はすごいなあと思った記憶があります。

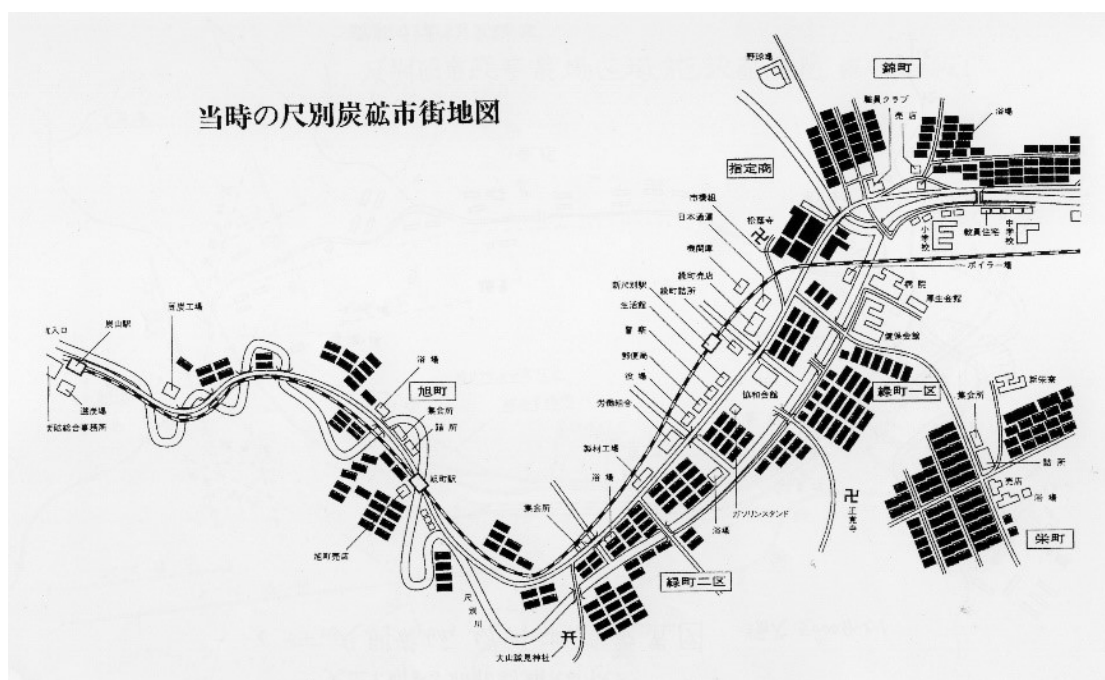
幼稚園まで、そういう勝手気儘な生活だったので、入園したときに「決まった時間に行って、決まった時間に帰ること、幼稚園・小学校・中学校って、これから行くんだな…」と思いました。私には、もう二度と自由な時間はないなと思った記憶があります。嫌な子どもですよ(笑)。

1965(昭和40)年、父が結核療養所から帰ってきました。当時、音楽教室は希少価値があって、いまだったら考えられないですが、ヤマハとかカワイの委託を受けて、学校の先生がふつうにピアノ教室をやっていました。土曜日と日曜日は、生徒さんが朝から晩までいるわけです。その間、なにしてるかって言ったら、一番奥の部屋でこもって

いるか、外にいるしかないんですよ。だから、父と遊んだ記憶がまったくないです。「ものごころ」つくときに父は療養所に行き、帰ってきた「おじさん」は、実は、仕事で忙しいというので、かなり歪んだ親子関係だったかなと、いま思います。それで「せっかく家でやってるんだから、習ったらいいいじゃない」みたいなことになって習い始めたのですが、そのときには親子の関係じゃなくて、師弟関係ですから、「よろしくお願いします」と「ありがとうございました」を必ず言わされた6歳児でした。

尺別での生活

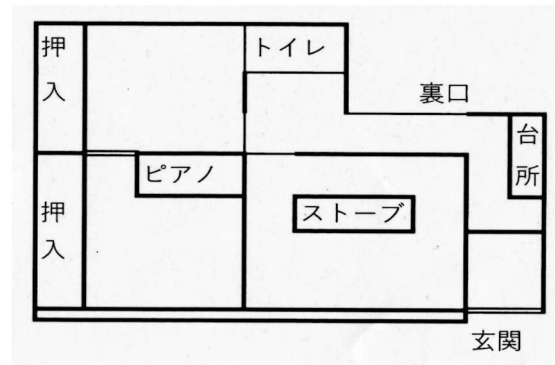
尺別炭砦小学校に入学したのは、1967（昭和 42）年でした。音別町の小学校のクラスは、松・竹・梅、松竹梅でした。いま聞くと、なんか不思議な感じがしますが、当時は当たり前だったようです。当時の尺別炭砦の市街図をみると、黒く塗っているのは、ほぼ 2 軒長屋です。2 世帯がつながっている状態です。尺別炭砦は、小さい自分にとっては広い街だったと思うのですが、いまこうやって見ると、これしかないのかという気がします。教員住宅がこのあたり、小・中学校の隣ですね。わずかに、点、点、点とあ



尺別炭砵市街地圖
(元尺炭中教頭提供)

るのが、教員住宅です。そこから子どもの足でも、ちょっと行くと山が迫っています。それから、このあたりの沢で、幼稚園ぐらいの頃から、子どもたちだけで勝手に上って、小さいカジカやドジョウ、ザリガニを獲ったりして、遊んだ記憶があります。山が迫っているのです、夏はクワガタやノコギリカミキリなど、たくさんの虫がブンブン飛んで家のなかに入って来て、蛍光灯の回りを飛んでる状況でした。あと蟻の巣分かれの時期に、羽蟻（ハアリ）がものすごい数出てきて、一晩かけて部屋の真ん中に洗面器を置いて、水を張って、そこに蟻を捕まえては入れました。洗面器いっぱい真っ黒になっていました。当時は網戸がありませんでした。そんなところですから、人が住まなくなると、あっという間に崩れるのもわかります。

炭鉱は山あいであって、雨が降ると急流になってきます。土砂崩れもありましたし、黒川には橋が何本もかかっていましたが、よく橋がなくなった記憶があります。それから、これは実際の教員住宅を思い出して描いてみましたが、8畳、6畳、4畳半です。ここに親子で住んで、ピアノがデンとあって、石炭を燃やすストーブ



教員住宅（世帯向け住宅）間取り

がけっこう場所を取ります。危ないので、そこは必ず網で囲っています。お客さんが来ると、たちまち狭くて狭くてとなります。それから、台所、裏口と書いてありますが、みなさん、これを見て、なにか気付かれることはないですか。…風呂がないです。いまはあまり考えられないと思いますが、世帯向けの住宅でも、風呂なしがふつうでした。炭鉱の人たちは銭湯を使うので、そこに入らせてもらうような格好でした。風呂まで子どもの足で10分ぐらいだったかな。冬場など、髪の毛がパリンパリンに凍ります。デーモン閣下みたいになりました。

尺炭の教員たち

話すときりがないので、このあたりにします。ストーブの回りは、石炭を燃やすとガ

ンガンに熱くて、外で遊んで帰ってきたら長靴のなかが濡れるので、ストーブの回りに置いて、乾かすとゴムが溶けて臭くなります。だけど、台所では置いていたミカンが当たり前に凍ってしまうし、寒いときには生卵が凍ってしまいます。それから、一番奥の部屋に布団を敷いて寝てると、夜、自分が吐いた息で、このあたりが濡れて、それが凍ります。いま思うとすごいですよね。でも、それは当たり前の生活でした。

教員住宅は、ヒエラルキーがあって、独身寮とか単身者向け住宅は「マッチ箱」と呼ばれていました。それぐらい狭かった。そして学校に近い。なにせ狭い街のなかでの狭い社会ですから、「あの先生が、盛り場で飲んで、飲んだくれてた」なんて、1日で町中の噂になります。お正月も、終業式のあとの先生たちの宴会も、学校でやったりして、二次会は誰かの教員住宅でやりました。「学校の先生たちって、こんなにひどい酔っ払いかたをする人種なんだ」と思いました。僕のオモチャなどを見つけて、「これはなんとかだ」とか言い出して、それでボキッと折ったりしました。「学校の先生なんてロクなモンじゃない」ということを、強烈に植えつけられて育ちました。さっきも言いましたが、父は其中で非常に長い期間いたので、そういう意味では、私は、ずいぶん周りからは大事にされたんだなあと、思います。

炭鉱のライフスタイル

子どもはとにかく多かったです。いまと違って、子どもにけっこう、任せてしまうようなことが当たり前でした。尺別は、いろいろな町ごとに、「子供会」があって、そこに住んでる子どもは学校が終わると、子どもだけで暗くなるまで遊ぶ。子供会は、だいたい小学校6年生のお兄さん、お姉さんまでで、上級生が下級生の面倒をみる。それは自然なことでした。いろいろな行事がありましたが、上級生が、代々、下の子たちにやり方を教え、大人の手を借りずにやるのがふつうでした。

炭鉱で独特なのは、三交代、一日中、採掘をしているので、遅出の人が、今晚、深夜に入るといふ人たちがいると、その家の軒に、「本日三番方」と、札がかかっていました。その家の前を通るときは、みんな静かにしなきゃいけない。子どもたちが遊びに

行くのも、その家ではなく、ほかで遊ぶことになっていました。日常、どんなことをやっていたかな。スペースがあれば、三角ベースといって、省略形の野球みたいなもの。ホームと1塁、2塁の三角です。それから、ドッジボールがこの頃に入ってきました。地面に線を書き、ボールがあればできます。

そして、学校の校庭にスケートリンクを作るのは、このあたりでは当たり前でした。1周 200m くらいの広いリンクをどこでも作り、朝からスピードスケートをバンバン、しもやけになりながらやっていました。また、最近、どんどん撤去されていますが、金属製の大きな遊具がどこにでもあって、遊んでいました。あとは「釘刺し」ってわかりますか。5寸釘、デカイ釘を逆手に持って、こうやって地面にビタッと刺します。次に刺したそこに、自分で線を引けます。そうやって、交替で陣地の広いのを競いました。5寸釘を子どもが当たり前に使えるのがすごい話ですが、たしか僕が小学1年のときに、5年生の人が自分の足に刺して、学校で禁止になりました。そういう危険な遊びがいっぱいありました。

小学2年ぐらいまでの記憶で、何がなかったかというと、家に冷蔵庫がほとんどありませんでした。冷蔵庫がある家は、教員住宅のなかで2軒ぐらいで、その家に氷をもらいに行った記憶があります。それから、ガスの湯沸かし器もなかったです。ガス自体は、プロパンガスがありましたが、湯沸かし器のシステムはなくて、石炭ストーブから出ている煙突の回りを囲うようにする、桶のような金属のモノがあって、そこでいつもお湯が沸いているという状態でした。そこから、柄杓で汲んで使っていました。そして、いまは信じられないですが、電話がなかったです。電話は集合電話で、たぶん学校にはあって、教頭住宅にはありました。なにか非常事態のときには、その家に行って、黒電話をクルクルクルッと回して、交換手につないでもらい、だれかが死んだとか、そういうときじゃないと、まず使えない状態でした。ちなみに僕の家には電話がついたのは、中学1年生のとき、釧路に移ってきてからです。今は携帯電話を当たり前のように使い、仕事中にかかってきて、ずっと持たされるというのは、「ウルトラマン」の世界でした。

とくに嫌な思いもせず、小学2年生がきました。その時期になると、実は炭鉱の景気がよろしくなくて、いずれ閉山になるというような風評は立っていました。それは子どもにも聞こえておりました。尺別を離れるとき、同じ系列の「雄別は、最後まで残るだろうから、尺別を出てよかったね」と、隣りの感じのよくないおばさんに言われた記憶があります。実はそうじゃなかったんですけどね。

2. 尺別を離れて、雄別、阿寒へ

雄別炭砒小学校へ転校：小学3年、1969/4

雄別に行きまして、こんどは、なんと3年花組でした。阿寒町は、花・雪・星・月、宝塚みたいになっていました。ほかの方もおっしゃっているみたいですが、尺別の人のほうがなんとなくおっとりして、穏やかな印象です。雄別は、人が荒い印象というか、おそらく雄別のほうが、会社の下請等、いろいろな階層の人たちの出入りが激しかったというのがあるの



雄別炭砒小学校校舎
(元雄別炭砒職員提供)

かなと思います。馴染むのがちょっと大変でした。そのころ、私、ちょっと肥満児で、近眼で眼鏡をかけていて、男でピアノを習っている。それだけで格好のいじめの標的ですよ。『ナメクジが嫌い』って言ったら、突然、あっちこっちから降ってくるんです。カバンのなかに、ドシャッと入っていたりする。それから、家に風呂がないので銭湯に行くと、子どもだけのときに、3年ぐらい上の悪ガキに蹴っ飛ばされて、沈められた記憶があります。そのときに「尺別ではみんなに大事にされていたな」と、薄れる記憶のなかで思い出した記憶があります。そういうことも、自分を突き放して見るような癖があったのかもしれませんが。

雄別の生活はそれなりに馴染んでいたのですが、1年経たないうちに、ちょうどいま

ぐらいの時期（9月ごろ）から、閉山がそろそろ決まるという話が出ました。寒くなる頃になると、週が変わると月曜日の朝礼で「だれだれさんが転校します」「だれだれさんが転校した」と、どんどん減っていきました。非常に寂しい思いをした記憶があります。雄別は、尺別より子どもが多くて、子どもたちも外れのほうからバスで小学校に通っていました。そのバスの運転手さんには退職金が出ないことになり、とても怒っているの、「運転手さんを怒らせないように、みんな行儀よくしろ」と、担任に言われた記憶があります。サラッと云いますけど、大変ですよ。

もう雪が降る頃から、町内にあったいろいろな店がどんどん減っていく。空いた家からいろいろな物が剥がされたり、盗まれたりする。だれかが壊してしまうと、壊れた物、なんでも持って行っちゃう。そのうち人が住んでいる家の庭木も盗まれる。うちも、たしか住んでいた家の植わっていたツツジが、朝起きたら、ゴボッとなかったという記憶があります。それから、解体の業者さんがいろいろ入って来るのですが、処理が面倒くさいと、そこに火をつけて燃やしてしまいます。本当かどうか分かりませんが、解体業者が火をつけたところが、たまたま炭層が表土に近いところがあって、そこが燃え始めてしまい、2年ぐらい燃え続けていたと。都市伝説かもしれません。ただ、つぎの年、阿寒に来て、「あっちのほう、ちょっと赤くボーッとしてるだろ。あれ、燃えてるんだよ」というのを学校の先生に言われた記憶があります。ほんとうだったら、ちょっと大変なことだと思いますが、本当かどうか分かりません。ただ、非常に子ども心に、人の心が荒んでいくのが見て取れました。



閉山数年後の雄別炭山駅前
（元雄別炭硯職員提供）

阿寒小学校時代：小学4～6年、1970/4/-1973/3

結局、3月いっぱい、隣り町の阿寒小学校に移りました。ここに来て、初めて炭鉱

以外の街でした。まずびっくりしたのは、当たり前かもしれませんが、阿寒の本町（ホンチョウ）は、けっこうたどると、親戚筋・町内の結婚が多いので、だいたい、大きく分けて3軒ぐらいの家の親戚でした。町内に住んでいると、町内の人たちが、その家の親戚がどこにいて、その人がどこで働いて、どのぐらいの給料だということを、みんな知っているような、狭いところでした。泥棒なんていない。よその人を見ると、すぐにわかってしまう。そういうところに初めて入りました。

自然はとても豊かなところだったので、やることといえば、毎日放課後、魚釣りに行きました。冬はやっぱりスケートですね。この頃、生物とかが非常に好きで、オモチャのような顕微鏡をもらって、水たまりのところで、プランクトンを見てスケッチすることが好きだったなと…。やっぱり、変な性分でしたね。これが、ずっとあとまで尾を引くことになります。そのときの5、6年の担任が強烈な人で、ほとんど半分ぐらいしか授業しない人で、あとは、説教しているような人でした。体罰は当たり前。全員並べて往復ビンタ。よくやられましたし、なんかやったら、担任が怒って帰っちゃう。授業が成立しないとか、それを泣いて謝って、みんなで教員住宅まで迎えに行く。考えられないと思いますが、それでもなんとかなる。その担任が、音楽の指導が好きだったので、僕はよく伴奏をさせられました。ちょうど、変声期がかかったので、歌えなくなっていました。歌いたかったけど、ピアノを弾かされていました。それから、音楽全般、とくに洋楽と言われているものに興味を持っていました。阿寒町はFMが入らなかったのので、FMを聴くために、テレビのアンテナや物干し竿などに針金を渡してつなぐと、少し聴けます。そんなことを、小学校のときにやりました。

中学に入るとき、父親が釧路に転出することがわかっていたので、釧路の附属中学校を受けたらいいんじゃないかと勧められました。なんか嫌で、ふつうでいいと思っていたのですが、親たちが勝手にどんどん話を進められました。でも、結果的に、その年から鉄道が通じていない地域から受けられないということになって、門前払いで、ちょっとホッとした記憶があります。ただ、そのとき初めて、世の中には中学受験というものがあるということを知りました。その問題集が、なかなか難しいけれど見たらおもしろ

い。おもしろいというか、自分でも解けるところがあると思ったのは、あとから思うと、「別に、ハンディに感じることはないんだ」と思ったきっかけです。

釧路市立春採中学校時代：1973/4-1976/3

そのあと、釧路の春採中学校に入学しました。今日、3年生のみなさんは、鉾区のところに行かれると思いますが、まさに、ヒルトップのあたりが、私がいたあたりです。当時の春採中学校は、全道一の大きな学校で、学年によって、1学年13クラス、一番多いところで15クラスありました。1学年の生徒が550人とか600人いました。そうになると、先生たちには、学年変わるとにクラス編成する余裕はぜんぜんなくて、卒業するまで、ずっと同じメンバーでした。要は中学校3つが、無理やりいるような感じでした。多様な生徒がいて、ロクなのもロクでもない者もいたという意味です。ほとんど学校に来ないのもいたし、よからぬ大人たちの使い走りをしているような者もいたし、そうでもない生徒もいて、それが同じクラスでずっといる。今思うと、いろいろな人がいるということを知っておくのは、良いことだったと思います。選抜されたメンバーだけですと、その世界だけしか知らないというのは、今の私のような仕事をする上では、大変困ったことになるので。

今、こうしてみると、良いことばかり思い出されますが、当時はそれなりに大変でした。中学のときに大きかったのは、音楽の先生に、リコーダー部というものに無理矢理誘われて、でっかいバス・リコーダーというものを吹かされました。ところが、それで、はまってしまい、それからはずっと邁進です。楽譜がなかなかない。たまにあると、外国の楽譜のコピーのコピーのコピーみたいな感じで、解説が書いてあるけど読めない。ドイツ語だったり、イタリア語だったりする。仕方なく、当時北大通にあった山下書店でドイツ語の辞典を買いましたが、活用のあることなんか、ぜんぜん知らないで、ただ読んでるから、ドイツ語って、enで終わる単語がずいぶんたくさんあるんだと…。バカでしたね…。結局あまり役に立たなかったのですが、そんな思い出があります。それから、楽譜が手に入らないので、テープに録音したものとか、エア・チェックしたもの

を、一晚、夜通し聞いて、一生懸命楽譜に直したりして、自分たちで使ったり、これもいい修行にはなりました。それからコンクールに出て、幸いちょっといい賞をもらったりして、ますます、はまりました。

転校を重ねて

小学校のときに転校を重ねて、どうだったかと言うと、その頃の自分はどこにいても前の住んでいた場所を引きずっているので、「そこに元々いる人間たちとは違う」「そこは自分がいる場所じゃないんだ」とか「この人たちは自分の仲間ではない、仲間と認めてくれない」という意識があったと思います。それから、自分はそういうバックグラウンドで言いたいことがある、人に聞いてもらいたいのですが、ほかの人たちは、はっきり言って関心がない。どうでもいいことです。自分にとっては、こんなに重要なことなのに、それを他人は聞いてくれない、あるいは、聞いてくれようもしない。そういうことなんだと思いました。なかなか、他人と理解し合うのは難しいんだということを自覚しました。そういうなかで、友人関係は、「友だち登録 100 人」というようには、とてもできなくて、近しい関係を簡単には作らないタイプの人間になりました。みんなで同じことをすると、やっぱりどうも気持ち悪くて、「違うやつがいてもいいだろう」みたいなことをしている。3 年前に、中学時代の同級生がたまたま居酒屋をやっているのがわかって、45 年振りぐらいに会ったのですが、「お前、入学式の時、風呂敷に国語辞典持って歩いてたよな」。そんなことしたかなと思ったんですけど、相当変なやつだと。どこか、自分のやっていることを、もうひとりの自分がこの辺にいて、「おい、なんか変なこと、お前はやってるな、なんでそんなことをやってるんだ」というふうに、客観視する自分がいるというのを意識したのは、中学校ぐらいのことでした。いろいろなことをやっていて、自分はものすごくそのことが好きで、詳しいことがある。これを人に同じように理解してもらうのは、無理な部分がある、ということをわりと早いうちに自覚してしまいました。だから、人に対して、私のことをわかってくれとは言わない。ただ、かなり妥協してしまった。その代わり「自分のやりたいことは、ちゃんとやりま

す」みたいなところが、つき合いづらい。ちょっと嫌なやつですね。

生まれた街がなくなること

さて、それで、特に自分のなかではとても重い尺別というところが無くなった。北海道全体が大体そうですし、特に炭鉱の街というのは、元々そんなに地縁、血縁っていうものが濃厚ではなくて、入って来る人もいるし、出て行く人もいる。ですから、阿寒町に行ったときに、初めて、その土地で暮らす人たち、自分たちの父親の土地を継いでいくという、小学生のうちから、そういうことを言う友人がいて、「これは、ぜんぜん違うんだな」と思いました。自分の街にずっといたのではわからないこともあるんですね。たとえば、人間関係は、黙っててできるのではなくて、やっぱり、新たなところへ行ったら、またゼロから作らなければいけない。無条件で相手のことを好意的に見てくれる、そんないい人たちばかりではないということ。自分にとってはとっても大事なことで、それに対してまったく関心のない人たちも、当然いるんだと。すべての人にわかってもらうことは、無理あるということなんですね。そんなことを、当時からずっと考えていました。

それをちょっと一般化すると、自分の持っている価値観と相容れない人たち、でも、その人たちも確かにいるわけですよ。そういう人たちを排除して、自分が生きていくわけにはいかない。だから、いろいろな価値観を持っている人がいるのは当然で、わかり合えないことも当然だと思って生活していくのが人間の暮らしではないかと、ずっと思います。ずっと同じ故郷を持っている人からすると、私は、自分が帰る場所は、今どこにもありません。そうすると、結局、自分の心の拠りどころはどこか、なにか自分が絶対に安心できる、自分が拠りすがることが必要。場所じゃなくて、それはモノだったりする。それは、私の場合、たまたま音楽がそうだったのかなと思っています。

3 高校から大学へ

釧路湖陵高校時代：1976/4-1979/3

本当は、文系科目が得意でしたが、高校は理数科に入りました。高校は生徒の半分が釧路の附属中学校出身で、彼らは、中学校からそのまま上がった友人がいるので、やっぱりここでも、なんとなく部外者的な感じでした。入学したときは、下から数えたほうが早かったのですが、最初の模試で私が1番になってしまいました。そうすると、附属中出身の人たちから、「附属中出身のわれわれをさしおいて、1番を取るのはどこのどいつだ」的な扱いを受けて、「とんでもないここに来たな」と思いました。臆病ですから、一生懸命そのあとも勉強しました。学校が終わって帰ってくると、だいたい6時間ぐらい平日やって、休日10時間ぐらい勉強していました。そしたら、やっぱりやれば成績が上がるので、自分でも「こんなことやってて、なんだろう」と、試験に絶対に出ない英単語を辞書から探して、そういうのを拾って集めました。そういう意味では、いかにも勉強してないのに成績がいい連中に、コンプレックスも少し感じていました。教室のなかでは、とくに居場所がありませんでした。

高校のあとの進路はどうなるか。その当時考えていたのは、自分の好きな生物系か、抛りどころでもあった音楽系か。しかしながら、自分の才能とウチの親の収入では無理だなと早々に音楽系は諦めました。無茶な勉強とかやっていたので、しょっちゅう具合が悪くなって、保健室に行って、寝させてもらったりしていました。保健室の先生に「医者になったら、楽器、買えるでしょ」と言われて、「あ、それか」と思いました。その人が、実は看護師の資格と保健師の資格を持っていたので、医者に近い存在だったということもあって、「医学部がいいでしょ」と言われました。「生物やってるなら、一番、面倒くさい生き物は人間でしょ」と言われ、「あ、そうか」と思ったのが、高校2年の春でした。

でも、そのあと共通一次試験というのが始まって、私はその1年目にあたりました。実は、私は英語や国語で圧倒的な成績を取って合計点で稼ぐというパターンだったので、制度が変わって、2次試験が理科、数学メインになったとたんに、成績が悪くなって、

判定が A だったのが D になって、「志望、変えたらどうだ」と言われるようになりました。好きな音楽のコンクールの全国大会が高校 3 年の 12 月 10 日でした。試験がその 1 か月後ですから、「これで、もし成功したら、お前が音楽をやっていて、抛り縫ったからだよね」と。「だけど、もし失敗したら、音楽のせいだよね」。どっちに転んでも、「音楽のせいだ」。そんなことを言われて、そんなことばかりを考えて、相当精神的に追い詰められていたのだろうと思います。

北海道大学医学部進学：1979/4-1981/3

うまい具合に転んで、大学に入れました。そしたらすごく楽でした。医学部は変な人たちばかりでした。成績はいいけれど、この人、医者以外の職業で社会人としてやっていけないなという人が、2 割ぐらいはいました。北大とはいっても、実は半数は道外の出身です。道外でも、半数以上は浪人生です。だから、年をくっている人たちが当たり前です。なので自分が見てきた世界が、実は狭いところでジクジク、思い悩んでいたんだなあと思いました。

大学生活も、この頃は当たり前ですが、6 畳一間で部屋にはシャワーも風呂もなく、近くの銭湯に行って、1 階に共用トイレがあってというような生活でした。授業はともに関心がありました。音楽に興味があるイギリス人の先生がいて、放課後ずっと教官室に行って、いろいろ話をして、申し訳ないことに課外授業をしていただきました。結局その先生は、その後日本に帰化して、彼の遺言で、彼の CD コレクションを僕が受け取ることになっています。同志ですね。楽器はやっていて、放課後も笛を吹いたりしてました。そしたらいろいろな人が寄って来るので、客寄せをしていました。同じアパートに、たまたま札幌リコーダー協会に所属している大学院生がいたので、そこに参加しました。そしたら、自分の親世代くらいで、いろいろな職種の方がいて、そういう人たちにお世話になりました。年が離れていても、趣味を通じて対等の友人としてつき合ってくれる、優れた大人たちでした。それは非常に人生の糧になりました。このときにリコーダー以外の古楽器という世界を知りました。

北海道大学医学部（基礎）：1981/4-1983/3

2年の教養を終えて、学部生になり、基礎医学、このときの基礎医学は、実は生物学に近いものがあるので、顕微鏡をのぞいたりするのがとても好きでした。なかなか充実した時期だったと思いますが、そのあと臨床が入ってくると、ちょっと興味がありませんでした。それまで理詰めで考えていたものが、経験則に基づいていく話が多くなると、あまりおもしろくなくて、危うく出席が足りなくなるところでした。でも、ずっと音楽はやっていて、たまたまラジオの公開収録があったので聴きに行ったとき、ワルター・ファン・ハウヴェというオランダのリコーダー奏者、当時は若くてカッコよかったのですが、彼の演奏を聴いて、楽器の音に魂を奪われるようになり、その楽器を作る人（平尾重治氏）が日本に帰って来たというので、矢も楯もたまらず、当時、宇治の工房まで、真夏に訪ねて、注文して、できたのが8年後でした。興味が持続できるだろうかとは思わない。大丈夫でした。

北海道大学医学部（臨床）：1983/4-1985/3

実際に臨床の勉強が始まって、とくに実習が始まって、患者さんと接する場面が始まると、興味は出てきたのですが、やっぱりここでも内科とか外科とかメジャーと呼ばれるところには惹かれない。つつい泌尿器科と耳鼻科とか、ニッチなところに惹かれる。どこがどう違うかと言うと、実は、内科というのは、診断をして手術が必要だと外科に渡します。外科で手術をする。手術が終わって、そのあとはまた内科に戻します。そうになると、ある部分を区切ってしまう。その人と接することがない。ところが、たとえば泌尿器科ですと、患者さんが外来に来て、その人を診察して、診断をつけて、治療法を選んで、場合によっては、薬による治療もあるだろうし、手術もある。そういったことも、手術もぜんぶ自分でやって、その経過を診ていく。最後、病気が進んで、死ぬのを見とどけるのも自分なんです。最終的に完結することを選べるのは、いわゆるマイナー科です。そういうところが好きな人間は、だいたいこういう科に来ます。だけど、いわゆる『白い巨塔』のように権力志向の強い人は、間違ってもマイナー科には来ないです。

結婚：1984/11

この頃は、一生懸命奨学金をもらったり、割りのいいアルバイトをしていて、学生だけど、授業料と生活費は稼げるようになりました。あまりすることがないので学生結婚しちゃいました。学生結婚といっても、実はカミサンとは高校生のときから付き合っていたので、他に世間を見る目がありませんでした。「あと、ふたりですることと言ったら、結婚しちゃうか、別れるか、どっちかだよね」という話になり、友だちと酒を飲んだときに、勢いで「じゃあ、医者になってから大変だから、いまのうちに結婚しちゃうか」と言ってしまって、本当に結婚式をすることになりました。妻は学校の先生になっていたの、その給料で式をあげました。朝、妻の弁当を作り、送って、朝ご飯の片づけをして、医師国家試験の勉強をして、洗濯して、夕方3時ぐらいに近くの市場に買い出しに行って、夕食の支度をして、という生活でした。その時間帯に若い男が市場にいと料理人の修行をしてる人だと思われる。市場の人たちも、やたら親切でいろいろ教えてくれました。それが今、たいへん役に立っています。何やってんだろうね（笑）。

4 医者として

医者になる：1985/4-

なんとか無事に医者になりました。医者になったら、とりあえず食えるのは間違いのないわけです。いろいろなことが自分でできると勘違いしてしまい、このように1年、2年単位であちこちに行きました。一方で、道内で古楽器のアンサンブルに参加して、あちこちでコンサート活動もしました。だいたい5年ぐらい経ったとき、医学博士とかやるのですが、選んだのは基礎医学のところで、電子顕微鏡でいろいろなものを見るということを始めました。走査電子顕微鏡というもので見る世界があります。これは星砂です。石垣島でお土産にもらった星砂ですけど、星砂は、有孔虫類という、細かい穴から脚みたいなものがいっぱい出て動いている生物の殻です。こういうのも調べる。それから、これはスルメイカの脚の細いところにつける吸盤ですが、こうやって見ると、エイリアンが悲しんでるようにも見えます。このギザギサの歯で引っかけて、滑らないよ

うにして、獲物を捕える。そういうのをこういう道具を使って見ます。たとえば、これはちょっと気持ち悪いかもしれませんが、ネズミの尿道の、オシッコ漏れないように締める筋肉の表面を見て、黄色いのはそれを走っている神経で、水色はそこに走っている血管です。それからこれは膀胱が伸びたり縮んだりするときに、膀胱の筋肉のまわりにある弾性線維という、ゴムで編んだ網みたいになっていて、これが伸び縮みして、膀胱の弾力性をもっている。こういうのをいかにきれいに見せるかということに熱中しました。

鉋路へ：1996/7

臨床と研究をやっているうちに、やっぱり身体を壊して、1週間入院しました。だんだん、やっていることが多過ぎて、どうしてもできないことも出てきました。それから、子どもも生まれてくるのに家族との時間が持てないとか、いろいろ悩みまして、1回大学を出ることにして。もう戻らないと。また、大学では先天的な病気の子どもを担当してるチームにいたので、鉋路、根室からも、当然一定の割合でそういう障害のある子どもが生まれてきて、治療が必要になったりするのですが、通うのが大変でした。そのうち、親たちが、来るたびに心身疲弊して行って、家庭崩壊して、いつの間にか名字が変わってしまうとか。そういう事例をずいぶん見てしまって、「これは、やはり地方にもそういう疾患を診れる人間が必要だろう」ということが帰って来る大きな動機でした。



手術中の後進の指導

戻って来たのですが、結局なんだかんだ音楽をやめず、鉋路でいろいろやって、時間ができれば、ぜんぶそっちへ行ってしまう。それで行くと思ったら、今度は大学で人がいなくなったものですから、無理やりもう1回戻されてしまう。戻されたら戻されたで一生懸命やったので、それなりにいろいろありましたが、今から20年前に、厚労省の

仕事でロンドンに行って、そのときに家族6人でイギリスに行けたというのが、唯一家族と長く過ごせた時間かなと思います。ウチの妻が、結婚前に占いで見てもらったら、「あなたには、旅行運がありません」と言われたそうで、「このとき一生の運を使い果たした」と未だに言われます。みなさん、恋人相手には、ちゃんと約束を守って、してあげないと、結婚してからも、いつまでも、何回でも、何年経ってからも言われます(笑)。

大学の人事の関係もあり、別に大学で偉くなりたかったわけでもないのに、また釧路に帰って来たのですが、大学の教授が定年退官になって、なにを思ったか僕のいる病院の院長になって来てしまいました。そしたら、また同じように使われるわけです。どんどん忙しくなる。その時期の思い出があるとすれば、今から10年ほど前に、たまたま釧路にお呼びした講演会の先生が、僕がむかし書いた論文をちゃんと見ていた人で、「ひょっとして、こういうことをしていなかった」と言われ、「してた」と言って、まだ発表していない写真を見たいということで、そこでまた会って、次の年から講演とかいろいろなことがあると僕を呼んでくれるようになりました。そのときの気分は、「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」と「人知らずしてうらみず、また君子ならずや」。そのときの自分の心境に、まさにピッタリ。どういう巡り合わせで、なにが実を結ぶかわからないということを体感しました。こういう思いが1回でもできたら、人生悪くなかったなと思ったので、もうそろそろ終わりかなと、ちょっと怯えたこともあります。

そういうことをいつまでもできるわけではなくて、いま釧路地域では、泌尿器科の医者が足りなくて、今後どうしていくかという大きな問題になっています。どうしていけばいいかと一生懸命考えることになったのですが、私はいろいろなことを先走り過ぎまして、結局、病院を管理している東京の本部とか、そういうところと軋轢を生じてしまう。一方で、親の具合が悪くなったり、いろいろあって、精神的にもかなり追い詰められて、「親が死んでも休めない」と思ってしまいました。結局それで疲弊して退職して、1年か2年、医者を休んで、親の介護だけに専念して、それからまた考えるかなと思ったのですが、一応大学の人事ではなくて、自由契約という形で今の職場で拾ってもらったような感じです。

現在

今は、それからもう7年ぐらいになるのですが、いろいろなことをやっています。こういう面子（メンツ）で、左上の白衣着ているオジサンが鉄道マニアで、講演の前に見た石炭列車のビデオにもちょっと映っていました。それから音楽も相変わらずやっていますが、いろいろな賞もいただいたりしました。ただ自分の好きなことをやっていただけですが、長くやっているとやっぱり貴重な人になってくる。ひとつのことを40年やっていると、世の中の人にはけっこう賞をくれたりするんだなと。しかし寄る年波には勝てず、前はやればやっただけ上手くなったけど、いまはもう、衰えないためには練習しないといけない。「継続は力なり」なので、どんなに短くても、どんなに遅くても、必ずちょっとだけは練習するというのをモットーにしています。



市立釧路総合病院の同僚（2019年）

故郷が無くなるということ

いま自分をふり返ってみると、自分にとっては、住んでいた街がなくなったということとは、やっぱり強烈な体験でした。どこか、そのときにいた感受性のまま、大人になりきれず、尖がった部分があるまま、今日に来てしまったかなと。思春期の感性が未だにあって、管理者と喧嘩してしまいますし、いろいろぶつかったりしてしまう。いい意味でも、大人になれない自分が、ここに在るかな。「自分のことは、自分で決めるしかないだろう」、「だれもわかってくれないんだったら、自分でやるしかないだろう」というのが、たぶん根底にあると思います。故郷が本当になくなったのか。それこそ、信じている故郷というのは、きっと自分の心のなかにずっとあって、それは一生涯刻印のように消えないものです。結局、自分のなかにある故郷というものは永遠にあって、それが自分を支えているのだと感ずることがあります。

くだらない話に、延々つき合っていただき、ありがとうございました。

～拍手～

質疑応答

笠原：どうもありがとうございました。幼少期からの転校や閉山の経験をもとに、その後、考え方がどのように変わったのかという、非常に興味深いお話をしていただきました。それでは、みなさんから、質問や感想などある方は挙手してください。

村雲：質問というと、難しいと思います。なにか、みなさんが、こういうことを聞きたかったとかありましたら、できる限り答えさせていただきます。

学生：今日は、貴重なお話をありがとうございました。故郷がなくなってしまったとおっしゃっていましたが、尺別や雄別は、街が消えてしまいましたが、そこに一緒に住んでいた方々とのつながりも、結局は、なくなってしまいましたか。

村雲：年代にもよると思いますが、小学2年生、3年生の子どもたちにとって、それから体験することがとても多くて、ふつうはそのあとの社会がきっと重要になってきます。ちなみに、僕の場合は、残念ながら、尺別時代の小学校の同級生とはまったく現在交流がありません。雄別のときも消滅してしまいました。それから、阿寒のときも、年賀状のやり取りが2人ぐらいかな。友だちを作るのが下手でした。ただ、自分が阿寒を離れて、何年か経って戻ると、自分がいたときとまったく違う友人関係ができ上がっていて、自分はそこから疎外されてしまっているというような感覚を持ってしまい、それから、行かなくなりました。やっぱり、時間は坦々と過ぎていくので、自分がそこに戻ったからといって、時間が戻るわけではありません。残念だけど、そういうことがあるんだというのは、中学生ぐらいのときに、けっこうグサツときた記憶があります。大人になって、たとえば、高校のクラス会をするというと、みんな一緒に年を取っていて、みんな

でそのときに戻れますが、そういうのではない関係ですね。

学生：あと2つ聞きたいのですが、釧路で過ごされるようになってから、いまは、もうだいぶ、原野に戻ってしまっていますが、雄別や尺別を訪れたことはありますか。

村雲：雄別は、すごくいいキノコが生える場所を何か所か知っているんで、子どもを連れて行きました。ひとりで行くのは熊が怖いので行きませんが。それから、尺別は何度か行きましたが、車で行こうとして、なんて言ったらいいのかな、いいような怖いようなどで、結局、途中で引き返しました。雄別のほうが、まだ、かつておられた方たちが近隣のところとかを少し整備しているので、いまみなさんも見に行けるでしょうが、自分のいたあたりは、もう斜面で、家のあったところが、下が水が張っていて、露だらけになっていて、時々、バキッと折ると、割れた皿だったりします。それは、廃墟巡りが好きな人にとっては、おもしろいのかもしれないけれど、そこで確実に自分たちの生活があった人間にしてみれば、そういうのを体験するのは、なかなか辛いものがあります。

学生：ありがとうございます。最後に、ひとつですが、釧路で病院に勤められたときに、2002年に釧路にいらっしゃったと思いますが、太平洋炭砒が閉山したときに、街の変化はございましたか。

村雲：まず、釧路ではヒルトップのところ、太平洋炭砒の職員住宅がワッとある鉱区で生活していました。あそこは、一大レジャーセンター兼ホテルみたいなところがあって、2000年の頃は、ジャクジー付きの素晴らしいお風呂の施設がありました。今も、その地域に家を借りて住んでいますが、周りがどんどん空家になっていって、借り手がいなくなっています。それから、そこで暮らしていた人たちのお子さんたちが、市内の違う地域に住んで、そっちで二世帯住宅を建てて、いなくなっています。春採、益浦、白樺台近くだと、買い物難民の問題とか、いろいろ出てきています。あとは、お年寄り、病

人が多いんです。いま、僕が住んでいる地区も、隣りの家、その隣りの家と、斜め前の家は、僕の患者です。ここが、若さだとか活気を取り戻すことは、たぶんないんだろうと思いつつ。しかし、その地域を見ている人間も必要なので、なんてことを考えながら、日々、町内会のゴミ出しをしたり、役員をやらされたりしています。

学生：今日は、貴重なお話、ありがとうございます。1点、お聞きしたいのですが、最後に、「故郷は自分のなかにある」というお話をされていましたが、いま釧路で生活されていて、「ああ、自分は尺別に生まれたんだな」とか、尺別が思い出される瞬間はどういうときは、具体的にどのようなときでしょうか。

村雲：そうですね。実は、釧路の生活は長いですが、子どもの頃の生活よりいい思い出は、あまりあるわけではありません。いま釧路に戻ってきて、一番よかったなと思うのは、カジカ汁が食べれることかな。鮮度のいいカジカで作った味噌汁は、ほかの地域で食べられない。あとはイカの刺身が、こんなに硬いもので、「おいしいな」と食べます。尺別のときのイカは、柔らかくて白くて甘いものでした。それは日経ったもので、鮮度が悪かった。だけど、そういうものをふつうに食べていました。ただ、釧路でなにかというと、反転したイメージとして、尺別でこういうものを食べていた、同じものを食べるのでも、こうだとか、店はこうだったとか、それから、スーパーマーケットじゃなくて、購買って組織があって、そのなかで、卵を量り売りしてたとか、そういうことが、釧路は都市部で便利なところがありますけれど、そういうことを感じるたびに、その裏で、尺別ではこうだったなと。常に、なにか考えて、並行してきたように思います。今、釧路での生活で、尺別にあったものを思い出す機会、それは、いま体験できるわけではない。ただ、その反転した、ネガとポジの関係のように、なにかやると、すぐ裏に尺別の生活が思い出されるというのは、常に付いて回っています。答になっているかわかりませんが。

学生：貴重なお話、ありがとうございます。私は、別な経歴があって、いろいろ引越して、故郷がありません。友だちとも連絡を取ってなくて、今、祖父母は中国に住んでいますが、ちょっと前に祖父が亡くなって、でも、東京にいないといけないという自分の立場があって、故郷、中国には戻れませんでした。日本にも、故郷があるのですが、どっちなんだろうと、自分のなかでは、わかりません。胸いっぱい苦しさもあるし、寂しさもある。そういう迷いと、悔しさを、どう乗り越えられるのでしょうか。音楽であったり。

村雲：音楽であったり、文学だったり、絵だったり、人、それぞれだと思うし。あるいは、いま、いる、友だちとの付き合いだったりするかもしれない。自分があなたの年齢のときに、いまみたいな「キレイごと」は、言えなかったと思います。いまだから、今日お話したような形にまとめることができる。ただ、その日その日を暮らすのに、精一杯だったし、それから、本当に消えてなくなっていきたいと思ったこともあったし。ただ、人間って故郷がないといけないものなのではないのでしょうか。違いますよね。その人が、どういう生活をして、どういう背景があるにしても、その人はその人として、私は私として、ここに現実にいるわけです。その自分がいるということだけで、存在意義があって、正しいことなのではないのでしょうか。そして、そこで自分の生活を築いて、そのときのことが、自分のなかでの「故郷」にあとで見るとなっていくのではないのかな。そこになれば、自分で作ればいいんだと思います。それぞれに、自分をもっと肯定的に見ていいのではないのでしょうか。

笠原：阿寒に行かれて、地縁と血縁が非常に強い地域だったとおっしゃっていましたが、私たちは尺別の研究をしていると、尺別もとても地縁が強い、雄別に比べるとすごく結びつきが強いという見方をしていたのですが、先生は、阿寒と比べると、それほど強くないとお考えですか。

村雲：自分の体験できる範囲がそうなのかもしれません。たとえば、私の父親の教え子だった人たちは、学年の結びつきがかなり強烈です。未だに、毎年クラス会をやっている学年もあります。ただ、それは、地縁なのかなと。彼らの場合、クラス、学校のつながりです。あと、炭鉱の場合、もうちょっと上の世代ですが、むかしでいう隣組みたいな、互助会的な組織がとても強かった。それから、たとえば、身内で不幸が出たときは、町内会同士で助け合いだとか、そういうのが非常に強かった。「講」というものをしていて、積立してと。そういうのは、尺別の場合、炭鉱の組織をあげて、奨励したという話も聞いています。だから、むしろ、そういうので結びつきを強くすることで、結束力を高めようと指導された面もあるのかなと思います。

阿寒の場合は、やはり、開拓して入った人たちは、開墾して、その土地に生きていくという気合の入った人たちです。普遍化するのは問題ですが、われわれは、よく十勝地区の人たちと釧路地区の人たちを比較して、ついつい言ってしまうのですが、地元出身者に対する態度が、十勝と釧路ではぜんぶ違います。十勝のほうが、地元に対する愛着がとても強い。いろいろなものを育てる気風だなあと。釧路の人は、冷たいのかなと思ったりしますが、それだけ、いろいろルーツが違う人たちがいっぱいいると。ひとつにまとめるのはなかなか難しいので、そういう歴史的な背景、構成人員、出身の関係というのもあるのかなと思います。

笠原：ありがとうございます。

村雲：では、ちょっと余興をひとつ。さっきご紹介した、自分がちょっとやばい精神状態のときに、工房に頼んで8年後にできたリコーダーを持ってきました。みなさんがよく見るのとは、だいぶ違うかな。これは大体、西暦1600年頃のタイプのリコーダーです。

「演奏もやるんですか？」とか言っておきながら、自分で譜面台を持ってきました。4、5分、おつき合いを。その頃、流行った曲をやります。「グリーンスリーブス

(Greensleeves)」って、みなさん知っていますか。
自分を無下に扱った女の人に対する恨みつらみを、
ネチネチと言っているという冴えない男の歌なんで
すけど、そう言っちゃうと身も蓋もない。メロディ
は非常にノスタルジックで、いいメロディです。

～リコーダー独奏～

～拍手～



リコーダー独奏

配布資料

尺別に生まれて
～個人の体験を振り返る～

村雲 雅志

1

自己紹介

- 1960年 尺別生まれ～小学2年まで尺別(→雄別、阿寒、釧路)
- 泌尿器科医(市立釧路総合病院)
- 父:村雲忠夫は 尺別中学校教員(音楽)1956-1969
- 古楽器奏者(リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ)・合唱指揮者



2

自己紹介

- 趣味:ハーブ栽培、料理(ガストーラ男子料理部員)、山菜採り



- 家族:妻、子供4人、猫3匹



3

尺別小学校(2年生まで ~1969/3)

- 1962 父が結核に罹患
洞爺の療養所へ(～1965)

- 1965 幼稚園の火災

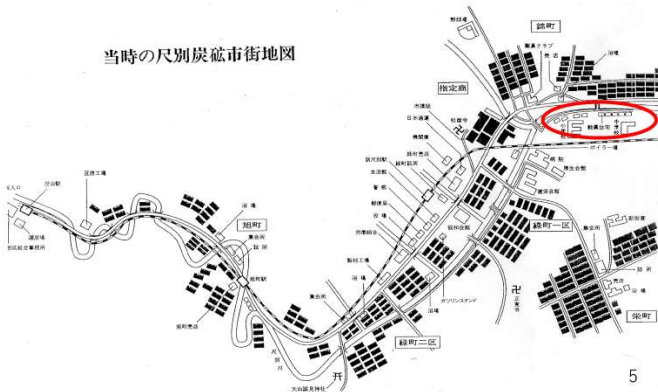
- 1966 幼稚園
- 1967 尺別小学校入学。
1年～2年 梅組

- 母子で生活。悲劇のヒーロー扱い?
- オルガン遊び
- 幼稚園に紛れ込み 絵本、図鑑など豊富に。
- 隣接した独身寮の教師たちに 何かれと構ってもらった

- もう 自由な時間が二度と来ないのだと
思った
- 1965 父が自宅でピアノ教室開始
ピアノを師事

4

当時の尺別炭鉱市街地図



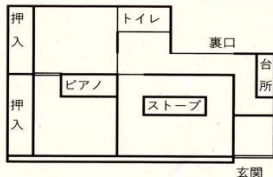
5



6

尺別の教員住宅

- 教員住宅:校長住宅・世帯向け住宅・単身者向け住宅・独身寮



- 石炭ストーブ(ルンペンストーブ)
- ストーブ周囲は暑い
- 台所は寒い
- 冬は 牛乳や卵が凍る
- 冬は、吐く息で布団の襟布が凍る

- 学校に隣接
- 地域の目もあり、宴会は教員住宅で持ち回り
- 幼児期から、泥酔した教員を目撃して育った
- 父の勤務期間が長かったため、丁重に扱われて育った

7

子供の生活

- 地区ごとに「子供会」 小学6年生まで
山神祭、七夕、灯籠流し などの行事では上級生が面倒をみる
- 父親が三番方の時はよその家で遊ぶ
- 日常の遊び:三角ベース、ドッジボール、スケート、遊具、虫採り、魚採り、缶蹴り、手つなぎ鬼、カッピン、釘刺し、花いちもんめ...
- なかったもの:冷蔵庫、ガス湯沸かし器(石炭ストーブに連結するものはあった)、網戸、電話、家風呂

8

<h3>尺別を離れて 雄別へ 1969/4</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と離別することを経験 ・街がなくなる? 「雄別は残るだろうから良かったね」 ・雄別小学校 3年花組 ・雄別は「人が荒い」印象 ・転校先での生活に順応するのが精一杯 ・肥満児、眼鏡、男でピアノ ・最初は 通学路でカバンにナメクジを入れられたり、銭湯で浴槽に沈められたりした。 ・尺別では皆に大事にされていた、と自覚 <p>9</p>	<h3>閉山が決まってから（雄別）1970</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・尺別・雄別・上茶路の3山同時閉山が決定 ・毎週 1～2名ずつ転校していく ・担任「バスの運転手さんには退職金が出ないことになった。運転手さんを怒らせないように」と ・廃業する店舗 ・庭木の盗掘 ・悪質な解体業者 ・地下炭層の燃焼（→閉山後1年以上） <p>10</p>
<h3>阿寒小学校（4年～6年 1970/4-1973/3）</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・阿寒小学校 4年花組 ・初めて炭砒以外の町に。地縁・血縁の強い農業基盤の町 ・魚釣り、野球、スケート ・生物に深い関心。顕微鏡でプランクトン観察 ・担任に強い反発と共感。合唱の伴奏 ・洋楽に興味を持つ。FM放送を聴くために配線 ・教育大学付属中学校受験を勧められたが地域外で不可。 ・「中学受験問題集」を知った <p>11</p>	<h3>釧路市立春採中学校 1973/4-1976/3</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・全道一のマンモス校 1学年13-15学級 ・3年間クラス替えなし ・多様な生徒が混在 ・リコーダー部 ・音楽に耽溺。楽譜の外国語を読みたくてドイツ語辞典を購入 ・テープから楽譜起こし ・コンクール出場 <p>12</p>
<h3>転校を重ねて</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・どこにいても帰属意識が持てない ・他人に理解されたいが、理解してもらうのは難しいことを自覚 ・友人関係を築くのが不得手 ・集団に同調した行動をとるのが不得手 ・時に奇行「入学式に風呂敷と国語辞典を持って来た変な奴」 ・自分を客観視している意識 ・どうしても譲れない一線はあるが、それ以外はかなり妥協 <p>13</p>	<h3>生まれた街がなくなること</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・もともと血縁・地縁の結びつきが強い ・他所へ出て、初めて理解できることもある： <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係をゼロから構築しなければならないこと ・自分に対して好意的でない人たちもいること ・「尺別」に関心のない人たちもいること *価値観を共有できない人たちと一緒にいなければならないこと ・「帰る」場所はない ・自分の心の拠り所が必要→たまたま音楽だった <p>14</p>
<h3>釧路湖陵高等学校理数科 1976/4-1979/3</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・40名。半分は教育大学付属釧路中学校出身 ・最初の模擬試験で想定外的好成绩 →いきなり好戦的な視線を受ける ・自傷行為のような勉強 ・「試験に絶対出ない英単語集」作成 ・成績へのコンプレックス ・課外活動に救いを求める。合唱部、リコーダー部創設 <p>15</p>	<h3>進路選択</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・生物系か、音楽系か ・家計と能力を考え、音楽系は断念 ・保健室で休んでいるときに、医学部志望に転換 ・共通一次試験の初年度 ・選択科目が変わり、模試での判定AからDに。 ・音楽コンクールは高3の12月 ・「受験に成功したら音楽のおかげ、失敗したら音楽のせい」 <p>16</p>

北海道大学医学進学課程 1979/4-1981/3

- ・「とんでもない人たちが」多くいて安堵した
- ・半数以上が道外出身者、道内の半数以上が浪人生
- ・アパートで自炊生活。6畳一間・風呂無し・トイレ共用
- ・英語ゼミで英国人教師と親しくなり、教官室に入り浸る
- ・空き教室でリコーダー練習。同好会参加。数学の先生に指導。
- ・同じアパートの院生に誘われ、札幌リコーダー協会に参加
年長の社会人集団（当時40-50歳が中心）に関わる
古楽器（チェンバロ、ヴィオラ・ダ・ガンバなど）を知る

17

北海道大学医学部（基礎）1981/4-1983/3

- ・組織学に熱中。ギターと絵画を愛好する助教授と知己になる
- ・時間外に第三解剖学教室に入り浸る。
- ・臨床医学に当初興味が湧かず、一時引きこもり気味に
- ・ラジオの公開収録で聴いたリコーダーの音に魂を奪われる
- ・楽屋に押しかけて 楽器を吹かせてもらう
- ・製作者を訪ねて宇治まで旅行。注文（8年後完成）



北海道大学医学部（臨床）1983/4-1985/3

- ・臨床実習が始まり、医学への興味が復活
- ・「メジャー科」には惹かれず。「マイナー科」を志向
泌尿科・耳鼻咽喉科・放射線科
- ・奨学金とアルバイトで自活可能に
- ・最終学年の11月に学生結婚
妻は教員。妻の被扶養家族に
試験勉強のあとは、家事をして夕食を作る毎日
近隣の市場に入り浸り、いろいろ教わる

19

医者として

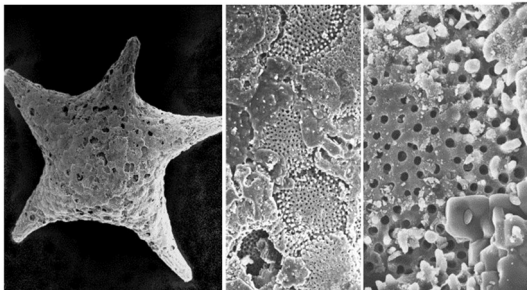
- ・1985/4 北大泌尿器科入局、
大学病院勤務
- ・1986/4 岩見沢市立総合病院
- ・1987/4 旭川厚生病院
- ・1989/4 函館協会病院
- ・1990/4 名寄市立病院
- ・1990/6- 解剖学第三講座にて
研究を開始。

- ・古楽アンサンブルに参加。
演奏活動開始。
- ・全道初のロビーコンサート。
- ・ロビーコンサート。
- ・道内各地で演奏。
- ・牛乳点滴事件。
- ・走査電顕の世界に耽溺。
研究に熱中。経済的に困窮。

20

星砂

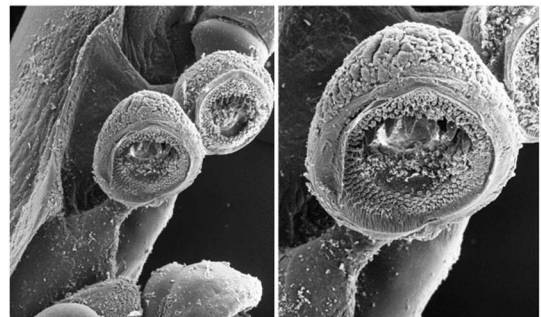
Baculogypsina sphaerulata 石垣島産



21

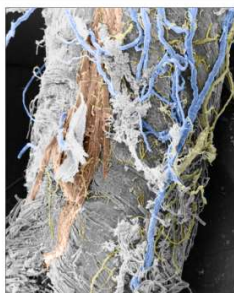
スルメイカ吸盤

Sucker, Todarodes pacificus 函館産

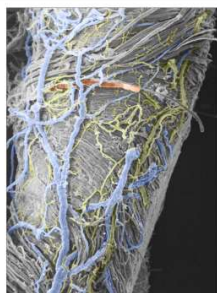


22

6週♂ 尿道前面
12時方向を縦走する横紋筋束を認める（茶）。
静脈（青）・神経（黄）。



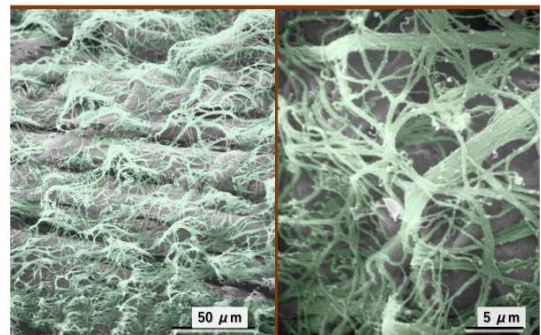
6週♂ 尿道左側面
横紋筋束は一定の方向性を持つ。動脈（赤）。



23

筋束を覆う弾性線維（エラスチン）

ELASTIN FIBERS COVERING SMOOTH MUSCLE FASCICLES



24

臨床と研究と音楽と

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1991/4 KKR幌南病院 1993/4 北大病院 1995/4 同・助手 | <ul style="list-style-type: none"> 泌尿器科開設。コンサート。過労でめまい。1週間入院 小児泌尿器科グループに参加。 Early Music Consort 最後の演奏会 2年続けて米国泌尿器科学会で発表 形態学研究グループを旗揚げ。その後自然消滅 家庭生活とのバランスに悩む 留学奨学金に落選。 大学を出ることを決意 |
|--|--|

25

大学病院で感じたこと

- 先天性泌尿器疾患の子供たちを担当
- 釧路・根室の患者も。
- 通院の負担が大きいく
- 親が心身とも疲弊していく
- 再来で見ていううちに 苗字が変わる…

26

釧路へ、そして再び大学へ

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1996/7 釧路労災病院泌尿器科部長 1999/7 北大病院・助手 2001/8 北海道大学医学部講師 2001/12 医学博士号取得 2002 厚労省派遣研究員
Great Ormond Street 小児病院（ロンドン）
短期留学 | <ul style="list-style-type: none"> 大学生生活のすべてと訣別するような気持ち 「釧路音楽三昧」活動開始。
釧路在住の演奏家との交流開始。
合唱再開。自主コンサート、演奏家招聘など
「古楽の夏・札幌」音楽祭スタッフ 無理やり大学へ戻された。 「膀胱における結合組織の立体構築」
厚労省研究班 「内分泌かく乱物質の生殖機能と次世代への影響」担当。 博物館・美術館・演奏会に耽溺。
家族6人でウィンダムニアに滞在。 |
|--|---|

27

またまた釧路へ

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 2002/5 釧路労災病院 2006/11 講演会講師が私の論文の愛読者と判明 2007 排尿機能学会パネリストに招聘 2009 特別講演
私が若いときの発表に感化されて研究を始めたという教授たちに巡り合う 2009 椿山荘で特別講演
いろいろな研究者の訪問を受ける
しかし、すでに基礎研究から離れていた | <ul style="list-style-type: none"> 再び釧路へ。
音楽活動も再開。
演奏家招聘 自主コンサート 合唱指揮 リコーダーコンテスト審査員 古楽セミナー運営スタッフ 翌年、大学の教授が院長として着任。
どンドン多忙に。 有朋自遠方来 不亦楽乎
人知而不愠、不亦君子乎
朋あり 遠方より来る また楽しからずや
人知らずしてうらみず、また君子ならずや |
|--|--|

28

またまた釧路へ

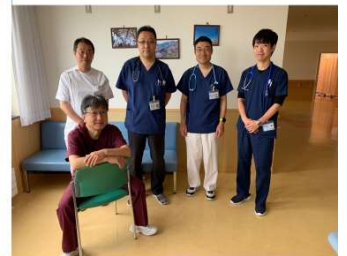
- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 2002/5 釧路労災病院 *新しい治療法・手術の導入・若手の育成に邁進 *病院の管理業務に関わらざるを得ず 2012/7 市立釧路総合病院へ | <ul style="list-style-type: none"> 新研修体制のもとで、地方の医師が減少 道東地域における診療体制について強く責任を感じる 病院の枠を越えた協力体制を模索するが、時期尚早とそしられる。 実践を急ぐあまり、管理者からは裏切り者呼ばわりされる 親の介護等、家庭生活の問題山積 親が死んでも休めない、と思ひ詰める 職場にも疲弊し 退職。 *大学の人事を離れ、自由契約として再就職 |
|--|---|

29

そして今…

- 総合泌尿器科診療
- 小児泌尿器科・女性泌尿器科の専門医
- 血液透析・腹膜透析
- 腎臓移植
- 癌の診療
- 緩和医療
- 腹腔鏡手術
- ロボット支援下手術（ダ・ヴィンチ）

- トラブル調整役
- 夜間呼び出しは辛くなってきた…



30

そして今…



足寄 2019/08/30

- 2年毎に自主コンサート企画
バロック音楽・現代音楽の北海道初演
新作委嘱初演
- 足寄バロック・コンサート音楽監督
- 全日本リコーダーコンテスト審査員
- 釧路音楽協会賞
- 釧路新郷土文化芸術賞

- 「衰えないために」練習が必要
- 毎日必ず吹く！

31

故郷が無くなるということ

- 強い思いが残る
- 時間が止まったまま
- 結局のところ、そこから自分の本質は変わっていない
- AYA世代の感覚のまま（AYA: Adolescent and Young Adult）

- 自分のことは自分で決めるしかない
- 自分の価値観を信じる

- 故郷は自分の中にある
- 自分の中にある 故郷は消えない

32

参加学生の感想（順不同）

- ・ 親の仕事で、自分の取り巻く環境の変化が生じる、炭鉱社会特有の生き方にとっても幼い子供が悩まされる事態を知った。学習では、大人社会のことしか、触れてこなかったもので、炭鉱の子供ってという視点で、こんなにも悩まれて生きている苦しさというのを感じた。

また、尺別という故郷は完全に閉山して、帰る場所がないという経験をなさっていた。先生もおっしゃってたが、自分の存在価値、自分が生きていることが存在意義であり、それでもそれでこそ故郷。自分の中にある故郷は消えないという言葉が、自分は経験したことないからこそ、難しかったな。

- ・ 故郷が無くなり、自分のよりどころを自分で作っている村雲先生の体験を知った。
住んでいた町が衰退して、同級生が毎週のように引っ越しをしていくという光景は想像しがたく、村雲先生はその意味では貴重な経験をされていると感じた。

- ・ 故郷がなくてもいい、というお話が強く心に刺さった。私も高校の時転校した時に現地で仲間に入りきれない感覚や故郷の友達が自分を忘れてしまっていたらどうしようと思ったことがあった。今はどちらの友達とも仲良くできているけれど、また同じ状況になったら同じような不安に襲われてしまうと思うので、その時は村雲先生のお話を思い出して頑張ろうと思った。素敵な演奏に感動しました。

- ・ 自分や人の感情の機微にきちんと気づける人間でいたいと思った。医者という職業の人の話を聞くといつも視野が広いとか客観的だとか感じるが、村雲先生もそうであるように感じた。頭の使い方なのだろうか。

自分の育った場所と人生がどこかでずっと関係していて面白いと思った。また違う場所で生活していたらどのような職業や生活を選んだのだろうと思った。

- ・ 幼少期に二度も、地元住民として炭鉱の閉山を経験している方のお話を聞ける貴重な機会だった。当時の感情的な部分まで、かなり赤裸々にお話ししてくださり、印象に残った。こういう子供期を経験したことで、今の自分がこうなっている、という自己分析を客観的にされている方だと思った。自分を取り巻く社会の激動に揉まれ、故郷が無いことに悩みながらも、自分なりに考えて克服しようとしているように見えた。講演だけでなくヒアリングもできたらよかったのに、と思った。

- ・ 先生の顔を見た瞬間に涙が止まらないという謎の現象がおこり戸惑いましたが、先生のお話にどんどん引き込まれ、気づいたら講演が終わっていました。お話自体にここまで集中できた講演を聞いたのは本当に久しぶりでした。最初から最後までかなり熱心に拝聴しました。講演を聞くと、レジュメを眺めているだけになってしまうことが多いのですが、今回は違いました。もっとお話が聞きたい、この人の人生が知りたいと思ったのは本当に久しぶりのことでした。あそこまで自身のことをさらしてお話できることにも驚きました。講演の後、演奏を拝聴できて感激です。趣味で音楽をされているとおっしゃっていた時から気になっていたもので質疑応答の後に時間があつたのは幸運でした。先生のように行動力をつけ、自分が好きなことややりたい

ことにどんどん挑戦していきたいと考えられるようになり、大変励みになりました。

- ・ 村雲先生のお話は、とても胸に響くものが多く、来年から社会人になる私も、いつ何が起こるかわからないため、そのようなとき何か心の支えとなるものを見つけておきたいと思いました。最後に演奏して下さったリコーダーの演奏も音色が心地よく、ずっと聞いていたい気持ちになりました。

- ・ なかなか聞けない講演会でした。他の角度から炭鉱について話を聞いてよかったと思います。そのあとまた尺別に訪れ、村雲さんが感じている故郷が消えた切なさを少し味わえました。多才である村雲さんにとっても惹かれました。

石炭が目にする形で人々の記憶の中に留まりますが、そのひとが語る物語も大事な遺産であり、その物語を聞いた人たちの心の中にも響くものになるでしょう。

- ・ 故郷がなくなり転校を繰り返し、帰属意識が持てないという辛い経験から始まるも、音楽や友人や生物への出会いを通じて、村雲さんという人が現在の生活を良いと言えるまでになっていく過程を知ることができ、大変興味深い講演でした。辛い経験が行動力のパワーになっていることを感じました。

炭鉱地域は元々のコミュニティ意識が強いという印象があるので、転校先の生活の馴染むことは相当大変なのでは無いかと思いました。

成績優秀で部活動においても実績を残している、側から見れば完璧に見える子供でも、故郷がないということを巨大な負目として抱えていて、医療や音楽の分野で充実している現在でも振り返ることができるほど衝撃的な出来事だったことに驚きました。それらの居場所は、故郷という現実の土地と比較してどんな存在なのか質問すればよかったと思いました。子供時代に経験する閉山は、地域社会に生きている実感を持つ前に分断されてしまうことなので、アイデンティティの形成に直接的に関わってくる大変な問題なのだと気づかされました。生まれの尺別の人が雄別より優しかったというのも、土地の人柄というより村雲さんが育った場所だったからではないかと思いました。

言ってしまうと村雲さんは現在エリートと呼んで良い立場にいらっしゃると思いました。ですので、他に閉山を経験した人のその後はどのルートを辿っていったのか、また、村雲さんはご自身が相当な努力をされたものもちろんですが、親が教師ということが現在の地位に関係しているのかも気になりました。

教員住宅が4種類に分かれているのが面白いです。また、泥酔した教員を見ることができる環境で、教員はろくなもんじゃなないと思っていたという話が印象的でした。共同生活ならではだと思いました。

工藤さんのヒアリングをした際も、炭坑地域で上級生が下級生の面倒をよく見ている話があり記憶に残っていましたが、村雲さんもそうだったと聞き、先山後山が関係しているのかなと感じました。

- ・ 村雲さんは暮らした二つの街がなくなってしまった経験があり、故郷がなくなることについてお話ししていただきました。私はお話を聞いて、これは炭鉱の街に限らず、東京で育った人たちも同じことを感じるのではないかと思いました。東京出身の

人は、生まれ育った地を故郷だと捉えていない人が多いと思います。東京で生まれ育った人が東京を故郷を感じられるようにするためには何が必要なのか考えるのも面白いと思いました。

- ・ 村雲先生の自身の経験を赤裸々に話してくださって色々と考えさせられるところがあった。私自身親の転勤などで一度も地元から動くということは経験したことがないため、ましては地元がなくなるということはおおよそ想像のつくことではなかったがお話を聞かせていただいて環境が変わるということの辛さは大きかったのだろうなと思った。その時期を支えてくれたのが村雲さんの場合は音楽などの自分の熱中できるものだったとお聞きして、その後のリコーダーの演奏には胸を打たれた。私自身は故郷というものは場所ではなく家族であったり大切な友達であったりなどの存在との共有する時間であるのかなとお話を聞いてなんとなく考えた。
- ・ 故郷がなくなるということは自分にはない経験であって、これからもなくなることもないだろうと思っている節があるが、村雲先生のお話はそのような IF を少し考えさせてくれたとともに、炭鉱街の生活を知るだけでなくどう生きていくかという大きなテーマを自分に提示してくれたと思う。
- ・ 工藤さんのお話と同じく、炭鉱のある町で暮らす人々がどういう思いで生活していたのかということ、内部で暮らしていた人の目線から説明していただいたことで、当時の情景などを理解することができたと思う。また、先生の勉強や趣味への姿勢や持っている価値観などにはとても感銘を受けた。笛の演奏も素晴らしいと思った。
- ・ すごく貴重で内容の重い話なのにとっても淡々と話している印象を受けた。自分の中で第三者的な目線で見ることができているのだろうか。
姜さんの質問も含めて、自分の出身地や両親の出身地、自分の育った「地元」と呼べる場所が自分の形成に大きくかかわっているのだと感じた。逆にそれを意識せずに生きてこれた私はその面では恵まれているのだと感じた。地元があることが必ずしも幸せであるとは言い切れないが。
- ・ おそらく自分が今後の人生で経験することはないであろう、「ふるさとを失う」ということで、自分がどうなるのかがなんとなくなくなってしまうのかがわかった気がする。
- ・ 今までゼミで勉強しているだけでは、炭鉱の終わりが町の終わりであるということの重みがいまいち実感できなかったが、今回、実際に故郷を失ってしまった人の話を聞いても、やっぱりそういった感覚というものが想像できなかった。想像できないからこそ、自分が実際に故郷を失ったときにどうなってしまうか分からず、怖くなった。

故郷をおもうということ

村雲雅志（1985 年卒）

地球温暖化に関連して石炭火力が批判されている。だが半世紀前まで日本のエネルギーを支えていたのは紛れもなく石炭で、数多くの炭鉱が存在し、そこには人々の暮らしがあった。しかし 1970 年代に相次いだ炭鉱の閉山とともに、ほとんどの町が消滅してしまった。私の生まれた町、尺別も。

早稲田大学の嶋崎尚子教授（社会学）は、コミュニティーの消失が教育へ及ぼす影響について、尺別をモデルに研究しておられ、釧路地方へ毎年フィールドワークに来られる。今年、学生さんたちへの講演を依頼された。お題は「故郷がなくなったこと、それが人生にどのように影響したか」。

軽い気持ちで引き受けたものの、幼い頃の記憶を解きほぐし、嫌な記憶の封印も解きつつ、その後半世紀の自分を振り返るという、かなり辛い作業となった。

結局「故郷とは自我を保つための拠り所となるもの」「自分は自分以外の何物でもない」「自分がよいと思うことは続けるべき」などと無難にまとめた。

講演を終え、ほっとしたところへ、学生さんから想定外の質問：

「私には故郷がありません。両親は中国人で、私が幼いころに来日してから各地を転々とししました。故郷を持たない人間は、どうすればよいのでしょうか？」

それは…。答えの用意もないまま開いた口から、自分で思いもよらない言葉が出た：

「あなたの周りを見てください。友人、御両親、あなたを支えてくれた人たち。その人たちと幸せな時を共有していますね。そうした大切な関係の存在こそがあなたの故郷と呼べるものだと思います。あなたの力で、新しく築いていくことができるのです。」

論理的な破綻はさておき、思わず自分へ言い聞かせる言葉が湧出してきたのだと思う。

後日、彼女からはがきが届いた。私の話で楽になったと。合唱団で歌っていて「夜もすがら」（鴨長明／千原英喜）が大好きです、とあった。最後に救われる歌である：

夜もすがら 独りみ山のまきの葉に 曇るもすめる 有明の月 （鴨長明）

（北海道大学医学部泌尿器科同門会誌（2019 年）への寄稿文を再掲）

解題：「尺別に生まれて：個人の体験を振り返る」から学ぶこと

笠原良太

1. 講演「尺別に生まれて：個人の体験を振り返る」

本講演は、早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミの 2019 年度釧路合宿 3 日目に実施された。合宿では“生きている炭鉱”釧路コールマインに関する学習が中心だったが、村雲雅志氏の講演から、釧路炭田内にかつてあった“生きていた炭鉱”での生活や閉山について知ることができた。

本講演では、「故郷」をテーマに、村雲氏の半生が辿られている。第一部では、彼が小学 2 年生まで暮らした尺別炭砦（雄別炭砦社、旧音別町）での生活について述べられている。教員の子供として生まれた村雲氏がみた炭鉱社会の一端が鮮明に語られている。第二部では、小学 3 年生から中学生までを、雄別炭砦、阿寒本町、釧路市という地域特性に触れながら語られている。第三部では、釧路湖陵高校と北海道大学での学生生活を振り返り、医師になるまでの過程が述べられている。第四部では、医師になったあとの職業キャリアと、村雲氏にとっての故郷について、整理されている。そして、村雲氏を支え続けてきたリコーダーの独奏で講演を終えた。ノスタルジックな音色は、村雲氏の故郷に対する思いが表現されているようで、印象的だった。

村雲氏にとっての故郷は、講演タイトルにもあるように、生まれ育った尺別炭砦である。閉山による故郷の喪失は、彼にとって「強烈な体験」であり、閉山から 50 年経った今日にかけて、その衝撃が続いていることがわかる。講演を聴いた私たちは、まだ「故郷」を意識する年齢やライフステージではないため、その衝撃の大きさを理解するのは容易ではなかった。ただし、村雲氏が葛藤を抱えながら故郷を見出し、「心の拠りどころ」を問い続けてきた経験に共感し、多くを学ぶことができた。

この解題では、村雲氏の炭鉱での生活と閉山の経験、その後の人生移行と人生回顧について、社会的コンテクストに位置づけながら解説する。それをとおして、教員の子供として炭鉱で育った経験と故郷喪失の経験が、その後の人生にどのように作用しているのかについてみていく。なお、尺別炭砦における人びとの生活実態とつながりについては、先頃刊行された『〈つながり〉の戦後史——尺別炭砦閉山とその後のドキュメント』（嶋崎ほか 2020）をご覧いただきたい。

2 尺別炭砦での幼少期——炭鉱社会における教員の子どもの位置

まず、村雲氏の原点である尺別炭砦について確認しよう¹。尺別炭砦は、現在の釧路市音別町尺別の奥地にあった炭鉱で、1910（明治 43）年に開鉱、1918（大正 7）年から営業出

¹ 嶋崎ほか（2020）第 2 章参照。

炭を開始した。1928（昭和3）年に雄別炭砒鉄道株式会社（三菱系）雄別砒業所の支坑となり、雄別・茂尻とともに「雄別三山」の一山となった。

尺別炭砒の特徴は、「全山一家」と呼ばれる共同精神である。戦前は友子制度による鉱員間の相互扶助が行われ、戦後、同制度が解消したのちもその文化と人間関係は継承された。また、戦後（1946年）、休坑からの復興は、炭鉱労働者だけでなく全山の努力によって成し遂げられた。こうした歴史的背景に加え、山間部に位置した適度な人口規模（最盛期で5,000人程度）の街という地理的条件によって、「全山一家」の精神を育み、持続したと考えられる。

尺別炭砒は、戦後復興ののち、しばらくは苦境を強いられた。1953（昭和28）年には大規模な人員整理・合理化が行われ、尺別（浦幌を含む）では、会社提案（坑内277人、坑外171人の人員整理）を大きく上回る637人が炭鉱を去った。翌年には浦幌炭砒が閉山し、離職者のうち転換希望者は三山に受け入れられた（尺別には90人が転換）。あわせて、主力坑をなたない奈多内坑からそうく双久坑へ移し、1951（昭和26）年に東卸坑を、1954（昭和29）年に北卸坑を開坑して、ようやく安定生産体制を確立した。

村雲雅志氏の父、忠夫氏が尺別炭砒中学校（以下、尺炭中）に赴任したのは、1955（昭和30）年、尺別炭砒が苦境を乗り越えようとしていたころであった。炭鉱会社（尺別砒業所）は、従業員だけでなく、学校や教員住宅（寮）の暖房（石炭）や電気、水道等を補助した。忠夫氏は、赴任した当時について、「会社も学校の教員に対する期待が大きく、待遇はよかった」と振り返る²。教員たちは、職員住宅街（錦町）に隣接した教員住宅に住み、共同浴場や商店などで児童生徒や父母たちと顔を合わせて生活していた。特に忠夫氏は、1969（昭和44）年までの14年（うち3年間は結核の療養）という長期にわたり勤めたため、児童生徒や父母から信頼を得やすかった³。このように、尺別炭山では、教員たちも「全山一家」の一員として共同生活を送っていたのである。

村雲雅志氏は、1960（昭和35）年、尺別炭砒の最盛期に生まれ育った。尺別炭砒は、このころベルト斜坑（1961年に開発着手、1966年に完成）や新坑（南直別）の開発を進め、生産力の拡充を図った。また、1963（昭和38）年には坑外職場の分離や賃下げを含む「尺別砒業所自立協定」が労使間で結ばれ、合理化が進められた⁴。この結果、1964（昭和39）年2月には出炭能率で「全国第1位」になった⁵。村雲氏は、山元唯一の幼稚園、小学校に通った。両校とも学校名に「炭砒」が入っているように、炭鉱との結びつきが強かった⁶。両校には、炭鉱の子どもはもちろん、炭山に住む商店の子どもや教員の子ども、隣接する

² 笠原（2018: 16）。

³ 同窓生に対しておこなった「尺別炭砒に暮らした人びと調査」では、「印象に残った教員」として、多くの学年から忠夫氏の名前が挙げられている。

⁴ 嶋崎ほか（2020）第7章参照。

⁵ 雄別炭砒株式会社尺別砒業所（1964）。

⁶ 尺別炭砒小学校（尺炭小）は、炭鉱が開基されて間もない1919（大正8）年に、会社の支援をもとに設立した（嶋崎ほか2020、第5章参照）。

原野・岐線（国鉄）の子どもが一堂に会した。職員から鉱員、組夫など階層も多様であった。そのなかで村雲氏は、学歴や文化水準において相対的に高い「教員の子ども」として学校に通った。そして、放課後は教員の子どもや隣接する錦町（職員）の子どもたちと遊び、「全山一家」のもとで「大切に育てられた」。

1960年代後半になると、尺別炭砦の閉山がうわさされるようになった。村雲氏は、転校のため尺別を去るとき（1969年3月）、「閉山になるというような風評」を耳にしていた。これは地元紙の報道や関係者へのヒアリングの結果とも合致する⁷。前年（1968年）末には、石炭企業の撤退をうながす第四次石炭政策が閣議決定し、すぐに雄別炭砦社の危機が報じられた。なかでも、雄別三山のなかで最も老齢化していた尺別炭砦の閉山が現実的となり、小学2年生の村雲氏が察知するほどにまで、閉山のうわさが広まっていたのである。

2 小学3年生での閉山経験——雄別炭砦企業ぐるみ閉山

村雲氏は、父親の転勤に伴い、小学3年生に進級すると同時に雄別炭砦小学校（旧阿寒町雄別）に転校した（1969年4月）。こののち、炭鉱の事態はさらに悪化する。4月には、雄別三山の一つである茂尻炭砦（赤平市）でガス爆発事故が起こり、7月に閉山した。特別損失が加わった同社の経営はさらに悪化し、その後、雄別炭砦を含む企業ぐるみ閉山が示唆されるようになった。年が明けて、1970（昭和45）年1月下旬には、尺別炭砦の閉山が提案された。組合（雄労連）は、2月初旬に中央動員をおこなったが、会社から企業ぐるみ閉山を提案され、2月27日に雄別・尺別・上茶路の三山が閉山した。雄別では2,328人、尺別では1,221人、上茶路では235人の全従業員が解雇され、閉山直後から各山元で職業斡旋が始まった⁸。街では商店が相次いで閉店し、坑内外施設の解体が進んだ。このとき、小学3年生の村雲氏は、「人の心が荒んでいく」ようすを察知していた。

もちろん、教員の子どもたちは、炭鉱の子どもたちのように父親の失業を経験しないため、閉山は間接的な出来事といえる。村雲氏は、閉山後、阿寒本町に移ることになるが、それは教員である父親の転勤という形態をとった。加えて、進路選択にはまだ猶予のある小学3年生というタイミングでの閉山であったため、閉山当時の中学生や高校生が経験した進路危機には直面せずに済んだ⁹。

ただし、短期間での地域崩壊は、教員の子どもにも大きな衝撃をもたらした。住民たちは、雪解けとともに全国に転出していき、5月末には雄別炭砦小学校が閉校した。約1万人が居住していた雄別の街は、閉山からわずか半年程度で崩壊した。同じく、尺別も全住民が転出し、約半年で地域が崩壊した。村雲氏は、「生まれた街」と「住んだことのある街」を一度に喪失し、その経験をしばらく抱えていくことになる。

⁷ 嶋崎ほか（2020）第7章参照。

⁸ 尺別炭鉱労働組合（1970: 25）。

⁹ 尺炭中3年生の進路危機については、笠原（2018）参照。

3 炭鉱を離れて、青年期から成人期へ

村雲氏は、小学校生活の後半を阿寒本町で、中学から高校までを釧路市で過ごした。阿寒本町は、流動的な炭鉱労働者とは対照的な地付きの農家が多い街だった。村雲氏は、産業特性の違いに着目して、炭鉱時代の友人たちとの比較をおこなっている。また、中学時代は、太平洋炭砒の山元にある春採中学校に通った。太平洋炭砒は、尺別や雄別と対照的な都市炭鉱であり、春採中学校には炭鉱の子どもに限らず、多様な職業の子どもたちが通った¹⁰。道内でも有数のマンモス校において、村雲氏は、自分自身の言動を「客観視する自分」や「他人と理解し合うこと」の難しさを意識するようになった。

この意識は、高校進学後も続いた。道東随一の進学校である釧路湖陵高校に進学した彼は、多数派である北海道教育大学付属釧路中学校出身者との関係を強く意識し、「コンプレックス」を抱えていたという。精神的な支えは、趣味の音楽だったが、大学入試を前に、音楽に専念できず、「精神的に追い詰められていた」。

彼にとっての転機は、大学に進学し、より広範な社会的背景を持った人たちと接するようになったことであった。北海道大学医学部には、道外出身者や浪人生、社会人経験者など、これまで会ったことのない「変な人たち」との出会いがあった。また、共通の趣味である音楽を通じて、親世代くらいの人たちや多様な職種の人たちと対等に交流したことが、「非常に人生の糧に」なったという。さらにこのとき、その後の彼を精神的に支えることになる古楽器やリコーダーとも出会った。そして、24歳のとき（1984年）には、高校時代から交際していた女性と結婚し、翌年から医者として働くようになった。

しかし、生まれた街を失った経験や相次ぐ転校による人間関係へのコンプレックスは、完全に払拭されたわけではなく、ライフコース上の重要な選択の際に顕在化した。村雲氏は、職業キャリアの選択において、メジャーではなくマイナーな診療科に魅かれて泌尿器科を選び、さらに、札幌（北大病院）ではなく釧路での地域医療に従事する進路を選択した。本人が述べるように、「思春期の感性」や「尖った部分があるまま」、職業・家族生活上の選択をして、諸課題に対処してきたことがわかる。加えて、職業柄、道内各地を転々としたため、「根無し草」のような感覚を抱きつづけたのである。

4 中年期以降の人生回顧と故郷創出

本人が講演のなかで述べているように、この講演で回顧された内容は、「自分で盛ってしまっている部分」が含まれているかもしれない。人生回顧には、回顧する時点の社会経済的地位や状況が反映するという観測時点効果が生じる。しかし、ここで重要なのは、60歳を前にした村雲氏が、これまでの経験をどのように意味づけてきたのかという点にある。

¹⁰ 笠原（2019）。

人は中年期以降、学縁や地縁など、過去の縁を求めて、自身のルーツやアイデンティティを再検討する¹¹。その際、一般的に、生まれ育った街、「故郷」が重要な参照点となる。故郷は、「空間的に移動して、かつ時間が経過することによって」発見される¹²。通常であれば、帰郷して旧友や恩師と再会し、ノスタルジーに浸ることができる。同期会や同郷会に参加できれば、尺別に近い釧路に在住していても故郷が発見されていく。

しかし、村雲氏にはいま実体としての故郷がない。前述の通り、閉山で尺別炭山は崩壊して自然に還り、生活をともにした友人や錦町の職員や教員たちもいない。また、現時点では、同窓会などの再結合もみられない。現在、活発に同期会を開いている閉山時の中学生や高校生たちとは対照的である¹³。村雲氏ら閉山時の小学生たちは、閉山と故郷喪失の経験を共有する相手もなく、自分自身のなかで故郷喪失の意味を見出そうとしている。

村雲氏は、故郷喪失に対して、以下のように意味づけ、対処してきた。第一に、故郷の代わりを見出すことである。それは、地域に限らない。村雲氏の場合、音楽が故郷の代わりとなった。第二に、故郷を自分の心のなかに見出すことである。村雲氏が述べるように、故郷は、自分が信じていれば、たとえ実体がなくとも心のなかであり、刻印のように消えないという解釈である。そして、第三に、故郷を無理に探そうとしないことである。生まれた街やかつて住んだ街に自身のルーツやアイデンティティを見出そうとするよりも、今ここで生活する自分を尊重するという実践である。それがのちに故郷となるように、「自分で作ればいい」と強調している。

5 村雲雅志氏の経験から学ぶこと

以上のような村雲氏の経験は、ほかの出来事で故郷を失った人たちに対しても、多くの示唆を提供してくれる。炭鉱の閉山に限ってみても、同様の経験をした人たちは多い。尺別・雄別閉山後、道内では大型炭鉱の閉山が相次ぎ、多くの炭鉱街が崩壊した¹⁴。当時の子どもたちは、現在、中年期から高齢期に移行して、故郷喪失に意味づけを行う段階にある。また、炭鉱の閉山以外にも、高度経済成長の裏で消滅していった地域は多い。典型例は、ダム建設による山村の水没である¹⁵。村雲氏の経験は、個人的経験であると同時に、産業転

¹¹ Clausen (1986=2000)。

¹² 成田 (2000: 15)。

¹³ 嶋崎ほか (2020) 第 11 章参照。

¹⁴ 雄別炭鉱企業ぐるみ閉山の直後に閉山した羽幌炭鉱(羽幌町、築別炭鉱・羽幌本坑・上羽幌坑が 1970 年 11 月に閉山)は、閉山当時 1 万人以上が住んでいたが、短期のうちに無人と化した。現在、太陽鉱工(株)(羽幌炭鉱の開発に携わった鈴木商店の後継会社である太陽曹達、太陽産業が前身)協賛のもと、「羽幌炭鉱大同窓会」が開かれている(鈴木商店記念館 2015)。また、1973(昭和 48)年 7 月に閉山した三菱大夕張炭鉱(夕張市)は、最盛期に約 2 万人が住んでいたが、閉山によって大半が転出した。わずかに残留した住民たちも、1997 年 7 月に夕張シューパロダム建設のため鹿島地区解散式が行われ、2015 年のダム完成とともに湖底に沈んだ(夕張シューパロダムふるさと誌編纂委員会 1998; 夕張市 2020)。現在、札幌と東京で同郷会(大夕張会)が組織され、活発な活動がみられる。

¹⁵ 岩田 (2000)。

換期を生きた人びとに共通した経験である。さらに、自然災害による強制移住など、生まれ育った地域に戻れない人びともいる。記憶に新しいのは、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故による避難であろう。2011年時点の子どもたちが、これから大人になるなかで、どのように故郷を発見し、創出していくのだろうか。村雲氏の経験から学べることは多いはずだ。

そして、本講演を聴いた学生たちも村雲氏の半生から多くを学んだ（「参加学生の感想」参照）。閉山による地域崩壊という出来事の実態に接近できただけでなく、それを子ども時代に経験したことのインパクトがその後の人生に長期的影響をもたらすことを理解した。これから職業選択をして成人期に移行する学生にとって、自分を見つめ直す機会となった。村雲氏が抱えてきた人間関係における葛藤やアイデンティティの模索は、私たちに訴えかけるものがあり、なかには涙を流しながら講演を聴く学生もいた。私たちが生まれ育った地域や産業、そこでの生活経験や社会関係が、今の自分にどのように関連しているのかを考える機会にもなった。村雲氏の教えは、今後の道標となるに違いない。

このように、本講演は、当初の目的以上に多くのことを学ぶ機会となった。つらい経験も含めて心情を吐露してもらった村雲雅志氏に感謝申し上げたい。

参考文献・URL

- Clausen, J.A., 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice Hall. (= 佐藤慶幸・小島茂訳, 2000, 『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部.)
- 岩田重則, 2000, 「過疎・廃墟・故郷」成田龍一・藤井淑禎・安井眞奈美・内田隆三・岩田重則, 『故郷の喪失と再生』青弓社: 175-225.
- 笠原良太, 2018, 「1970～80年代における炭鉱閉山と青年たちの進路危機——中学3年生の作文分析」『WASEDA RILAS JOURNAL』6: 127-39.
- , 2019, 「太平洋炭砒の暮らし」嶋崎尚子・島西智輝・中澤秀雄・石川孝織編『釧路叢書第38巻 太平洋炭砒 なぜ日本最後の坑内掘炭鉱になりえたのか 下』釧路市教育委員会: 55-90.
- 成田龍一, 2000, 「『都市空間』と故郷」成田龍一・藤井淑禎・安井眞奈美・内田隆三・岩田重則, 『故郷の喪失と再生』青弓社: 11-36.
- 夕張市, 2020, 「夕張スーパーロダム」, 夕張市ホームページ, (2020年10月5日取得, <https://www.city.yubari.lg.jp/kanko/miruasobutaiken/syuparodam.html>).
- 夕張スーパーロダムふるさと誌編集委員会編, 1998, 『大夕張——鹿島で暮らした日々』北海道開発協会.
- 尺別炭鉱労働組合, 1970, 『道標——山峡の灯』.
- 嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子, 2020, 『〈つながり〉の戦後史——尺別炭砒閉山とその後のドキュメント』青弓社.

鈴木商店記念館, 2015, 「『羽幌炭砦大同窓会』について報告いたします。」, 2015 年 10 月 1 日,
(2020 年 10 月 5 日取得, <http://www.suzukishoten-museum.com/blog/post-136.php>).



尺別に生まれて:個人の体験を振り返る
—村雲雅志氏による講演の記録—

(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.18)



発行日:2020 年 11 月 30 日



編集:笠原良太

発行者:産炭地研究会(JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>



本報告書は、2019～2023 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 B)『高度成長下での産業転換と労働者家族の移住過程:石炭産業における大規模移動の動態』(課題番号・19H01576 研究代表者・嶋崎尚子)による研究成果の一部である。